平成３１（令和元）年度

学　校　評　価　資　料

「あきた型学校評価」ＰＤＣＡ

分掌　p. 1～11

総務部　教務部　生徒指導部　進路指導部
特別活動部　保健衛生部　研修部　図書・視聴覚部
教育相談部　資格取得部　情報教育部

学年部 p. 12～14

１年部　２年部　３年部

各教科 p. 15～22

国語科　地歴・公民科　数学科　理科
保健体育科　芸術科(音楽)　英語科　家庭科

工業科 p. 23～26

機械科　電気科　環境システム科　建築科

秋田県立由利工業高等学校

平成３１年度

評価領域	総務部

重　点　目　標	諸規定の整備	P
現　　状	現「校内規程集」は平成２２年度にまとめられたものである。これまで、いくつかの規程（教務規程・申し合わせ事項、特活表彰規程など）の見直しがあったが、ページの差し替えで対応してきた。冊子版は古くなり、各規程の整合性の確認も必要になってきている。	
具体的な目標	校内規程を整備し、規程集を更新する。	
目標達成のための方策	・各規程の整合性を確認しつつ、新「校内規程集」を編成する。 ・冊子「校内規程集」を更新し、電子データとしても確認・活用できるようにする。	
具体的な取組み状況	とりかかれていない。	D
達　成　状　況		

自　己　評　価	（評価） C	（根拠） とりかかれていない。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） C	（意見） ・まず、工程表を作成の上、編集責任体制を組織することからはじめると良いのでは？ ・実行することが第一歩。とりかかって欲しい。 ・早期の取り組みをお願いします。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	諸規定の整備について、次年度も重点目標としたい。工程表を作成し、年度の早い時期からとりかかりたい。		A

P：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　D：実践（Ｄｏ）
C：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　C：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
A：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	教務部

重　点　目　標	教務内規を改訂する	P
現　　状	教務内規の改訂については昨年度ある程度進めたが、まだ途中である。今年度は、主要な部分についても部内で検討し、改訂版を年度内に作成し、来年度の施行を目指す。	
具体的な目標	１０月頃までに改定案を教務部内で検討し原案を作る。	
目標達成のための方策	・教務部内で矛盾点や改善点を出し合う。 ・次に、原案を作る。 ・職員会議に図り決定する。	
具体的な取組み状況	部内で協議し、教務原案を作成した。	D
達　成　状　況	教務原案をもとに、各科で検討後１２月職員会議で審議した。	

自　己　評　価	（評価） B	（根拠） １２月の職員会議で審議し、ほぼ完成することができたので。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・総務部同様、ＰＤＣＡのための工程表が必要。内規は何年周期で見直すのか中長期的方針が必要。 ・この原案を次年度に活かして欲しい。 ・内規を改訂して何を目指すのか明確にした方が良いのでは。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	今年度は内規の改定を実施したが、来年度から運用していく中で改定が必要であれば改定し、柔軟に対応していかねばならない。また、来年度は、新学習指導要領に対応した教育課程を作成する予定である。		A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	生徒指導部

重　点　目　標	いじめの未然防止・早期発見・早期対応の徹底	P
現　　状	毎年、生徒間のいじめが数件発生しているが、幸い未然防止・早期発見・早期対応によって、どのいじめもすぐに解消している。ただし、表面には出てこないいじめがある可能性がある。	
具体的な目標	いじめの存在がアンケートではなく、本人からの訴え、教師の気づきによって発見できる学校の雰囲気・態勢をつくる。	
目標達成のための方策	・職員会議等で気になる生徒を全職員が共通理解し、全職員がアンテナを高くし、早期発見につなげる。 ・昼休み巡視を強化する。 ・ＳＮＳ等ネットパトロールの強化する。 ・当然、いじめアンケートを例年より多く、実施する。	
具体的な取組み状況	・いじめアンケートを２度行った。 ・各学年部と連携を図り、情報を共有し対応した。 ・朝の登校時や昼休みに、生徒の様子を観察した。	D
達　成　状　況	・アンケートから数件のいじめが発覚したが、いずれも学年部を中心とした対応で、ある程度解消されている。	

自　己　評　価	（評価） A	（根拠） アンケートによって発覚したものについてはある程度の解消はなされているが、引き続き継続した対応、観察が必要である。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A B A	（意見） ・良好な活動である。「人権」に対する倫理教育（講話など）の企画など考えては如何か？ ・いじめ発覚から要因をさぐって欲しい。長い目で見ていかないと再発の可能性あり。 ・重要な取り組みだと思います。継続して、未然防止をお願いします。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	来年度のスマホネット全校集会の講師を NTT ドコモにお願いした。スマートフォンやインターネットの使用のしかたに関連して、いじめについても指導したい。引き続き、いじめは常に起こりうるものと認識し、情報収集と観察、指導についても継続していきたい。		A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	進路指導部

重点目標	キャリア教育の充実と生徒の進路実現	P
現状	進路に関する必要な資料等が閲覧できる環境を整えてきた結果、主体的な行動ができる生徒が増えてきた。一方で、生徒や保護者が企業について理解不足のまま応募先を決めている状況が見られる。	
具体的な目標	・企業説明会が生徒にとってより実りあるものにするため、事前の企業研究を促す指導を学年部とともに行う。 ・就職応募先の決定にいたる過程で、複数社を比較検討させる指導を行う。	
目標達成のための方策	・本校で実施する地域企業合同説明会の実施１ヶ月前から、生徒が企業情報等を収集・分析するマニュアルを作成し、実行させる。 ・3 年生の就職希望者に、1 つの企業だけでなく同業他社を含めた複数の会社訪問計画書を提出させ、比較検討させる仕組みをつくり、実行させる。	

具体的な取組み状況	3 月実施の地域企業説会にむけて企業研究マニュアルを作成中 複数会社訪問の理由やメリットを職員や生徒に説明した。	D
達成状況	企業研究マニュアルは作成途中 複数社訪問を行った生徒は増えたが完全ではない。	

自己評価	(評価) C	(根拠) 企業研究マニュアル作成が未達成	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) C C B	・内省的な自己点検である。スピード感を持って成果物を作成するには、工程管理が重要だが、対処しているのか？ ・マニュアルが完成することにより、進路に活かされると思うので、ぜひ作成を。 ・マニュアルを完成させ、企業についての理解を高めてください。	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	企業研究マニュアルを年度末まで作成する。４月より３年生対象に運用し、改善を加える。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践（Action）

平成３１年度

評価領域	特別活動部

重点目標	生徒が主体的かつ意欲的に活動する学校づくり。	P
現状	特別活動関係の規程に実情に合わない部分が見受けられる（例：無窮館）。部活動の強化にともない保護者・生徒の経済面での負担が重くなっている。	
具体的な目標	特別活動関係の校内規程集・大会参加等の手引の改定。	
目標達成のための方策	規程集・大会参加等の手引の他に、予算の執行等もふまえながら、改善を図る。令和元年中に改定案を策定し、年度内に職員会議での決裁を得て、次年度より施行する。	
具体的な取組み状況	改定の原案策定に取り組んだ。また無窮館の使用に関しても内規の見直しを行った。	D
達成状況	上記二つの原案はまとまったが、特別活動部会での審議を行っていない。	

自己評価	（評価） B	（根拠） 無窮館に関する見直しは、職員会議での了承を得たが、他はその段階に至っていない。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・自己評価は妥当である。工程管理を見直すべきではないか？ ・早々の取りかかりをして欲しい。 ・主体的かつ意欲的に活動する学校づくりと、規程集・手引の改定がどのように関わるのか、もう少し明確に。	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	無窮館見直しにとどまり、それ以外は原案の段階でとどまった。来年度の課題としたい。また工程管理の見直しとのご指摘は適切と考えるので、来年度は見直したい。規程集・手引改定の意義も教員以外の人にもわかるようにしたい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	保健衛生部

重点目標	校内外の清掃の徹底。	P
▽		
現状	校内外の清掃状況は概ね良いが、ゴミの分別状況が悪く業者に回収してもらえない場合がある。また、行事の際の清掃やゴミの分別が徹底できていない。	
▽		
具体的な目標	各学年・分掌との連携を密にし、年間を通して校内外の清掃計画を立て、清掃を実施する。	
▽		
目標達成のための方策	・4月　ゴミの捨て方指導　・5月　自転車小屋のゴミポイ捨てチェック ・6月　グラウンド周辺のゴミ拾い　・7月　モップ交換 ・8月　学校周辺のゴミ拾い　・10月　校舎内外大清掃 ・12月　モップ交換　・3月　清掃用具点検と整備 その他　各学期始業式と終業・修了式当日の大清掃	

具体的な取組み状況	・4月　ゴミの捨て方指導　・5月　自転車小屋のゴミポイ捨てチェック ・6月　グラウンド周辺のゴミ拾い　・7月　モップ交換 ・8月　学校周辺のゴミ拾い　・10月　校舎内外大清掃	D
達成状況	予定通り実施できた	
▽		

自己評価	(評価) A	(根拠) 保健委員会の活動で全校生徒がしっかり動いた	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	(評価) A	(意見) ・自己評価は妥当、かつDの内容も優れている。 ・月毎の具体的な取組み案の提示が良いと思った。 ・OKです。大切な取組です、継続をお願いします。	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	清掃状況を担任とクラス全員が現状を確認するため、生徒保健委員会で月１回１週間のチェック体制を作りたい。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践（Action）

平成　３１　年度

評価領域	研修部

重点目標	授業力向上のための研修を充実させて研究集録・研究紀要の内容に生かす	P
現状	昨年度は指導主事訪問にあわせて、授業研修会を行った。 様々な研修の参加者に原稿を依頼し内容的に充実した。 今年度は学校で日程を組んで実施する。	
具体的な目標	教務等と連携をとりながら、早期に授業研究会のテーマ等を設定する。 研修者への積極的な原稿依頼を行う。 初任者研修委員会組織を機能させる。	
目標達成のための方策	・授業研究会のテーマを早期に企画・立案する。 ・研究収録のテーマも合わせ、一貫性を持たせる。 ・企画は職員に周知しテーマを意識した研究・研修・調査などを依頼する	

具体的な取組み状況	各分掌と連携を取りながら初任者研修を進めている。	D
達成状況	校内研修については現時点では具体的に進んでいないが、11月末に実施出来るように準備を進めていく。	

自己評価	(評価) B	(根拠) 校内研修については12月に実施することが出来た。	C

↑
基準評価
↓

A:具体的な活動がなされ目標を達成できた
B:具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C:具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。但し、根拠は、目的に到達しなかった事柄に基づくべき。 ・研修により資質向上を高めていって欲しい。 ・授業力向上に結び付けてください。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	研修により教員の資質向上を高めていく。 研修により授業力向上に結びつける。		A

P:目標の設定(Plan)、D:実践(Do)、C:実施状況の中間把握(Check-1)
C:自己評価[年度末の評価](Check-2)A:改善方策の実践(Action)

平成３１年度

評価領域	図書・視聴覚部

重点目標	図書館運営を充実させ、読書活動・学習活動の推進を図る。	P
現状	学校司書を中心に、図書委員生徒の活動が年々積極的、主体的になってきている。ただし、大きな成果が出ているとは言いがたい。	
具体的な目標	本の紹介活動等を増やし、生徒が本を手に取る機会を多く作ることで、貸し出し冊数を５％増加させる。	
目標達成のための方策	・企画展示の充実 ・館外への情報発信の機会を増やす	
具体的な取組み状況	新入生への図書館オリエンテーションを実施し、授業の調べ学習や長期休業中の課題に図書館を活用した。また、各学年部に移動図書館を設置した。	D
達成状況	未だ年度途中ではあるが、４月～９月分の貸し出し冊数が 1,353 冊で、既に前年度１年分の貸し出し冊数 1,166 冊を５％以上、上回っている。	

自己評価	（評価） A	（根拠） 本の紹介活動を実施し、貸し出し冊数を５％以上増加させることができたため。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A	（意見） ・自己評価は妥当である。具体的なＫＰＩも明解。「移動図書館」は名案と思う。 ・良い取組だと思う。今後、全生徒が本に関心を示す様な取組を期待したい。 ・目標や達成状況が数値化されており、とても良い取組です。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	情報発信の機会を多く設けたことで、貸し出し冊数を大幅に増加させることができた。委員会からの情報発信や移動図書館、授業での利用は継続していきたい。学年末の休校の影響もあり、朝学習での読書が未実施に終わってしまったので、来年度は進路指導部と連携して朝読書の時間を設定し、読書習慣のない生徒への働きかけを強めたい。		A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	教育相談部

重　点　目　標	指導に配慮の必要な生徒の把握と全職員による情報の共有	P
▽		
現　　状	生活や学習、コミュニケーションなどで問題を抱えた生徒が複数在籍し、学年外を含めた学校全体での情報共有がよりいっそう必要だと考えられる。	
▽		
具体的な目標	日常の観察やアンケート調査などにより、生徒が大きな問題を抱える前に情報を共有し、迅速な対応につなげる	
▽		
目標達成のための方策	・面接週間を実施し、学年部の生徒理解を支援する。 ・特別支援教育委員会との連携を図り、定例職員会議時に配慮が必要とされる生徒や気になる生徒についての情報共有を行う。 ・エゴグラム、アンケート調査などを活用し生徒理解を深める	
▽		
具体的な取組み状況	・４月末～５月初め　生徒面接週間実施 ・６月エゴグラム実施 ・ケース会議　２件 ・職員会議で「気になる生徒」の報告会も行った。	D
達　成　状　況	生徒理解および情報共有に関して、効果的な方策を模索している状況である。ケース会議や職員会議での報告も行ったが、恒常的に続けるところまでに至らない。	
▽		

自　己　評　価	（評価） B	（根拠） ケース会議や情報交換を行っても、そこから次のステップをどうしたらいいか考えあぐねてしまい、効果が上がっていると言いがたい。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・自己評価は妥当である。「見守り方」「支援方法」まで、議論→試行→検証のループが重要なのではないか？ ・ケース会議から専門機関への相談へと繋げていって欲しい。 ・工夫して次のステップに進めてください。	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	自己評価後に、発達障害に関する職員研修を行うことができた。また、１月以降、ある生徒に関して、スクールカウンセラーや特別支援教育の専門監とのケースカンファレンスを行い、外部との連携によって指導方針を定めることができた。次年度も継続したい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

あきた型学校評価

平成31年度

評価領域	資格取得部

重点目標	資格取得に対する意欲向上を図る。	P
現状	『由工スタンダード資格編』が策定され，各科において資格取得指導が充実し，ジュニアマイスター顕彰を受賞する生徒が増えてきているが，難易度の高い資格の取得者が少ない。	
具体的な目標	各学科と連携し、ジュニアマイスター顕彰の受賞者３０名（ゴールド、シルバー、ブロンズ）をめざす。	
目標達成のための方策	1．資格・検定試験の内容，日程，結果を生徒へ示す。 2．合格証書とジュニアマイスターポイントの自己管理を徹底させる。 3．資格得点上位者を掲示する。 4．ジュニアマイスター顕彰を実施する。	
具体的な取組み状況	資格・検定試験の内容，日程を教室へ掲示した。また、校内の掲示板を利用しポスターによる案内をした。	D
達成状況	日程を周知することにより、個人の希望する資格を確実に受検することができている。	

自己評価	(評価) B	(根拠) ジュニアマイスター顕彰対象者が目標に達していない (現在20名申請予定)	C

↑ 基準評価 ↓

A:具体的な活動がなされ目標を達成できた
B:具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C:具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。未達となった原因を考察すべきであろう。 ・ポスター、呼びかけ等で生徒に意欲を持たせて欲しい。 ・継続して取組をお願いします。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	各教科・各学科と連携し資格・検定の紹介とジュニアマイスターポイントの個人通知等を徹底し、生徒の意欲向上を図る。		A

P:目標の設定(Plan)、D:実践(Do)、C:実施状況の中間把握(Check-1)
C:自己評価[年度末の評価](Check-2)、A:改善方策の実践(Action)

平成３１年度

評価領域	情報教育部

重点目標	情報機器の円滑な運用	P
現状	各種情報機器について、不具合やトラブル等に対して業務に支障が出ない範囲で対応できているが、学校全体で共有している情報機器で、その存在や機能が十分に周知されていないものが少なからず存在している。	
具体的な目標	情報機器のスムーズな運用を目指すとともに、既存の情報機器の利用率を上げるため、年１回実施する情報教育に関する調査等での昨年度の総利用時間数の２割以上の利用時間数に増加させる。	
目標達成のための方策	・元号の切り替わり等に伴う不具合等に速やかに対応する。 ・既存の情報機器の操作方法について機会をできるだけ逃すことなく実践を通して理解していただくよう対応する。	

具体的な取組み状況	・令和対応アップデートの実施を職員へ告知しほぼ完了している。 ・ソフト、ハードの両面において、適宜対応できている。	D
達成状況	・一部端末で令和アップデートが適用できない機器がある。 ・情報機器の運用においては、ソフト、ハードの両面において操作方法がある程度浸透してきていると思われる。	

自己評価	（評価） A	（根拠）必要な機会に情報機器を運用できるように適宜対応し、併せて経年劣化に対する対処と更新の不具合解消に向けて対応策を検討している。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A	（意見） ・自己評価は妥当である。機材の陳腐化が早いので、情報収集と試用に注力をしたい。 ・きちんと機器が整備されることにより学習向上に繋がると思う。 ・継続して取組をお願いします。	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	・今後さらに学力向上をねらいとした効果的な情報機器の利活用を図れるように支援していきたい。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践（Action）

平成３１年度

評価領域	１　年　部

重　点　目　標	由工スタンダード生活版の徹底	P
▽		
現　　状	全体的に概ね良好であるが、体調不良などによる欠課も見られる。また、一部であるが生活に落ち着きのない生徒がいることから、基本的な生活習慣の大切さについて徹底させ全体に波及させたい。	
▽		
具体的な目標	５Ｓを意識した環境整備に力をいれ、落ち着いて学習することができるようにする。由工スタンダード生活版の自己管理に力を入れ、整理整頓運動チェック者数１０名以下やスマホの指導、紛失及び盗難事故０を目指す。	
▽		
目標達成のための方策	・学年集会等での全体への注意喚起。 ・各クラス風紀、体育委員等によるクラスへの呼びかけ。 ・帰りのＳＨＲでの担任による指導。	
▽		
具体的な取組み状況	由工スタンダード生活版の時間厳守等を重視し、学年集会等での整列指導や朝学習定着の指導を行った。携帯の使い方についてＨＲや行事等の機会に注意指導を行った。	D
達　成　状　況	携帯の校内使用の注意指導を受ける事案が複数回おこるなど、まだ徹底されていない。集会時の整列はある程度時間前行動ができていた。	
▽		

自　己　評　価	（評価） B	（根拠） スマートフォンなどの利用について、留意点がまだ徹底されていない。時間厳守についてはおおむね良好である	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・未達の原因を考察した上で、次のＰへ向っていただきたい。 ・社会人として大切な基本的生活習慣を引き続き指導していって欲しい。 ・具体的な目標が数値化されているので、達成状況も数値で！	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	行事における時間厳守はおおむね達成できた。紛失について数件、スマホの指導件数が６件起こるなど不十分な面もあった。ＬＨＲや各行事等で、生徒への指導を徹底し、由工スタンダードの意識をもたせていきたい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	２　年　部

重　点　目　標	基礎学力の定着	P
▽		
現　　状	多くの生徒が中学校段階の学習を積み残したまま高校へ進学してきており、高校での学習に支障を来している。また最近は就職においても最低限の学力が要求されており、次年度の進路活動にも大きく影響することが予想される。	
▽		
具体的な目標	基礎力診断テストにおいて、ＧＴＺがＤ３以下の生徒を１０名以下にする。	
▽		
目標達成のための方策	Ｏｎｅ－Ｗｅｅｋトライアルをしっかりと取り組んでから受験させる。 学力不振者に対して、授業だけではなく朝学習や放課後、長期休業などを利用して学習指導をおこない、学習へ向かう意識を喚起する。	
▽		
具体的な取組み状況	第１回基礎力診断テストに向けて、２度ほど２年生全員の One-Week トライアルを回収し、取り組み状況を点検した。取り組み状況の悪い生徒に対しては、その日の居残り指導を行った。	D
達　成　状　況	1 年第 3 回において 37 名いた D3 ゾーンの生徒が、2 年第 1 回では 22 名までに減少した。しかし、夏休み直後に実施した 2 年第 2 回では 31 名となってしまった。	
▽		
自　己　評　価	（評価） B （根拠）教師側が手をかけたことにより、D3 ゾーンの生徒は減少したが、目標とする 10 名以下までには至っていない。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	（評価） B （意見） ・自己評価は妥当である。ＫＰＩの変化と教務スケジュールがリンクするなら、分析の上、対策はむしろとり易いのでは？ ・これからも生徒の学力のつまずきを個々にあわせて指導して欲しい。 ・目標とする１０名以下に取り組んでください。	C
▽		
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	義務教育段階の積み残しについては、低学年次より１年をとおして継続的に指導する必要がある。資格試験や部活動との兼ね合いもあるが、放課後や長期休業などを利用して指導する。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	３　年　部

重　点　目　標	職業観・勤労観の確立と、自己の進路目標の達成	P
現　　状	これまでの各教科の学習や進路学習をふまえ、進路意識は向上しているが、進路決定に向けてさらなる努力が必要である。	
具体的な目標	年度内に進路決定１００％を目指す。	
目標達成のための方策	・生活指導の徹底 ・進路面談の充実と進路指導部、保護者との連携強化、情報の共有	
具体的な取組み状況	挨拶等の礼儀指導を進路活動に結びつけた。また、数回に渡る学年集会での呼びかけ、担任と保護者の三者面談によりスムーズな進路活動を行った。	D
達　成　状　況	年内に進路決定１００％を達成した。	
自　己　評　価	（評価）A （根拠）目標は年度内であったが、年内に達成できたこと。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価）A （意見） ・自己評価は妥当である。ご努力に敬意を表する。 ・職員の指導により、良い結果につながったと思う。 ・ＯＫです。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	この目標は今年度のものであるが、積み重ねたノウハウ等は次年度以降にもつなげるよう、申し送りをしっかりとしたい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	国　語　科

重　点　目　標	基礎・基本的な漢字力・語彙力の定着を図る	P
現　　状	漢字力・語彙力不足から、文章の読み取りを苦手とする生徒が多い。このことが就職試験作文や大学入試小論文を書く際の苦手意識につながっている。	
具体的な目標	漢字や語彙の学習に取り組む姿勢を授業で養い、家庭学習を促すことで、基礎力を定着させ、基礎力診断テストの学習到達ゾーンＢ以上の生徒を 10 %増やす。	
目標達成のための方策	・漢字問題集、国語常識問題集の有効利用を図り、毎週確認テストを行う。 ・図書館の本や資料の有効利用を図る。	
具体的な取組み状況	漢字や国語常識問題集を活用した確認テストを予定通り実施し、成績不振者には事後指導を行っている。図書部と連携し、１・２年生に図書館の本を利用した本の紹介文を書かせ、夏休み課題として提出させた。	D
達　成　状　況	問題集や確認テストへの取り組みは学年が上がる毎に良くなっている。本の紹介文は１、２年生全員分の作品を由工祭で展示し、好評であった。基礎力テスト学習到達Ｂゾーン以上の生徒は残念ながら減少している。	

自　己　評　価	（評価） B	（根拠） 課題の提出状況や確認テストの結果を見ると、意欲のある生徒は増えている。しかし、基礎力の定着には至っていない。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・自己評価は妥当である。基本的な「読解力」の近年の低下への対応には時間が必要かもしれない（小→中→高→大→社会）。 ・もっと本を活用し読書力をつけたらどうか。 ・Ｂゾーン以上の生徒が減少しているとしたら別の対策も必要では？	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	中間報告後の基礎力診断テストで、Ｂゾーン以上の生徒数に変化があった。２年生は減少したままだが、１年生は２学期から３学期にかけて 11 %増加している。入学後に身につけさせた基本的な学習習慣がようやく結果につながってきたと感じる。 来年度は、図書館との連携をさらに深め、問題集やテストを有効活用することで、実生活に役立つ国語の基礎学力を養成していきたい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１（令和元）年度

評価領域	地歴公民科

重点目標	基礎基本の定着を徹底し、主権者となる意識を高める。	P
現状	基礎学力不足と家庭学習の習慣が確立していないため、正確な知識が定着していない。例えば、前年度の地理の最後の考査では日本や秋田県の地名の地図問題の正解率が６８％と、７割を切っていた。税に関しても「相互扶助」の概念が低く、主権者としての意識涵養が不足している。	
具体的な目標	(1)基礎基本の定着～各考査において小中学校の知識をベースとした基礎知識を問う問題の正解率８割以上を目ざす (2)納税者となる意識の涵養	
目標達成のための方策	1)基礎基本の定着 科目の適性に応じて用語や基礎知識に関する小テストを定期的に行う 2)納税者としての意識涵養 １年生の現代社会の授業において外部講師を招いて租税教室を行う	
具体的な取組み状況	・地理Ａでは、地図の小テストを行い、定期考査にも問題を組み込んで知識の定着を図った。 ・現代社会では、教科書を読んで自分でワークを解かせることにより、読解力の向上と、基礎知識の理解を図った。 ・租税教室を行い、その後の授業で税に関して学習することで、「公平性」などについて考えさせた。	D
達成状況	・小テストが小テストのための小テストになってしまい、その時覚えるだけでなかなか次につながらないという課題が生じている。 ・租税を通じて「公平」という概念を考えたことで、納税の重要性を自覚するとともに、様々な家庭に配慮すべきという考え方ができるようになってきた。	

自己評価	（評価） B	（根拠） 目標の 1)に関しては達成できず、その過程も再考が必要である。2)に関しては納税者としての意識の涵養のみならず、「公平性」や「公共」という概念を考えるまでに生徒が変容し、こちらの思っていた以上の成果を上げ得た。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・自己評価は妥当である。小テストは「工夫のしがいがある」とプラス思考で考えたい。 ・これからもいろいろな取り組みをおこなっていって欲しい。 ・具体的な目標が数値化されているので、達成状況も数値で！	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	来年度は、達成状況も数値化できるようにデータをとっていきたい。一方で、教科に関しては新指導要領を見据えて、評価方法や授業の進め方などを変えていかなければならない時期だと思うので、新課程をにらみながら目標設定していきたいと考えている。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　Ｄ：実践（Ｄｏ）　Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）
Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）　Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	数　学　科

重　点　目　標	生徒の学力に応じた指導の充実	P
現　　状	生徒個々の学力において、基本的な計算力及び数量的な感覚が不足している生徒が増加してきている。数学への苦手意識の原因となっていると考えられる。	
具体的な目標	生徒の間違いや気づきなどを生かしながら、計算過程の進め方を具体的に確認する。 授業時間内における生徒の演習量を確保する。	
目標達成のための方策	教科書、副読本への取り組みを促す。 ・単元ごとに演習時間を設定する ・考査は一定量を教科書、副読本から出題し、併せて提出物課題として評価に組み込む	

具体的な取組み状況	副読本を中心に演習時間を確保した。 ・進度に余裕を持たせて、考査対策の問題演習を行った。 ・考査は提出物である課題を中心に出題し、振り返り課題とした。	D
達　成　状　況	課題提出の重要性を理解し、取り組みは学年進行で良くなっていると思われる。また授業時間内の演習時間を有効に活用できていると思われる一方で家庭学習時間が減少しているのではないかと思われる。	

自　己　評　価	（評価） A	（根拠）適切に単元の区切り、進度に余裕を持たせ、授業時間内の演習を確保するとともに、考査前はそれに直結する内容を取り扱うことで基本事項の確認ができた。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A	（意見） ・自己評価は適正と思われる。外部にはＫＰＩでないと成果度が伝わらないことも意識して欲しい。 ・良い取組だと思う。家庭学習への意欲向上へもつながっていって欲しい。 ・目標や達成状況を数値でお願いします。	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	学習内容の精選（取捨選択）、学習教材の指定（何をやれば良いか）と学習時間確保（学習に取り組む機会）が必要だと考えている。定期考査とは別に小範囲でのテスト等で動機付けし基本事項の理解と定着を目指したいと思う。授業である程度の理解と取り組みを確保し生徒の家庭学習へとつなげていければと考え、根気強く取り組んでいこうと思う。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	理　　科

重　点　目　標	科学的現象への関心向上、更なる理解への基礎力定着	P
現　　状	入試段階から理科を苦手とする生徒が多い。実験を行うと興味関心を示す生徒がほとんどであり、積極的に参加する。しかし、「面白い」だけで終わり、何故そうなるのかを考えるまでにはなかなか行き着けない。数学的な基礎力もかなり不足している生徒が散見される。	
具体的な目標	基礎的な内容を身につけさせ、各学期末の欠点保有者数を各クラスの１割以下にする。	
目標達成のための方策	・単元毎の実験に加え、演示実験や実物を呈示、ＩＣＴの活用をすることにより、興味関心を引き出す。 ・チェック問題や小テストを頻繁に行い、確実にできるようになるまで再提出させ、内容の定着を図る。 ・基礎知識不足の生徒を早い段階からピックアップし、放課後等を使って指導する。	
具体的な取組み状況	実験数が少し足りないので今後増やしたい。問題演習に関しては頻繁に行っており、力がついてきているように感じている。基礎知識不足の生徒に対しては長期休業で集中して指導した。また、ＩＣＴを活用したプリント形式の授業に取り組み始めている。	D
達　成　状　況	細かな演習により少しずつではあるが力がついてきているように感じている。	

自　己　評　価	（評価） B	ねらいはまずまず達成されてきていると思うが、更に工夫をしながら取り組みたい。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） B	（意見） ・自己評価は適正と思われる。外部にはＫＰＩでないと成果の度合いが伝わらないことも意識していただきたい。 ・細かな演習の大切さを実感。継続を。 ・目標が欠点保有者１割以下とありますが達成状況はどうなりましたか？	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	・取り組んでいるＩＣＴを活用したプリント授業を更に進め、成績上位者の向上心もくすぐるようにしていきたい。 ・欠点保有者も２学期時点で１割以下に抑えられたので、今後も、生徒に対する甘い評価にならないよう気をつけながら、指導したい。	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　　Ｄ：実践（Ｄｏ）
Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）　Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）
Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

令和　元　年度

評価領域	保健体育科

重点目標	活動の主体的な計画、スポーツを楽しむ習慣と態度の涵養	P
現　　状	球技選択におけるグループノートを活用しての授業で計画の立案、実践そして反省という流れの中で生徒は主体的に活動することはできてきている。その中で基本的な運動能力の低下により、活動を楽しむ所まで到達しない生徒が増えてきている。	
具体的な目標	グループノートを活動の中心とし、その内容のさらなる充実を図る。その中で、運動を論理的に捉える能力を育むために言語活動を大切にし、授業を展開していく。	
目標達成のための方策	・一年次では、各種目の基本的な技術向上を図るために、段階別に活動を展開する。 ・グループノートの質を向上させるために、体育理論との関連を図る。 ・生徒の主体性を育むために、図書館との連携を密にし、生徒が調べやすい環境をつくる。	

具体的な取組み状況	2、3年生は計画通りに取り組み、積極的に授業に取り組んでいる。1年生は、グループノートの活用の仕方や授業への取り組みについて、継続して指導している。	D
達成状況	一部グループノートの記録がルーズになったところがみられた。主体的に授業に取り組むために、引き続き指導が必要である。	

自己評価	(評価) B	ある程度積極的に授業に取り組んでいる。一部グループノートの記録がルーズになった。技能の上達という面で不十分である。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	・自己評価は妥当である。少し活動を続けた上で、問題点を抽出するのが良いと思われる。 ・グループノートルーズの原因をさぐり改善策を。主体的な活動につながると思う。 ・具体的な目標の言語活動とはどのような活動ですか？	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	ノート学習の質を上げつつ、個人の課題を設定させ技能の上達を目指したい。生徒が主体的に授業に取り組むことはもちろんのこと、生涯スポーツにつなげる指導をしていきたい。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践（Action）

平成３１年度

評価領域	芸術科　音楽

重点目標	基礎・基本的な読譜力の定着	P
現状	１年生のほとんどの生徒が楽譜についてほとんど理解できない、もしくはゆっくりと時間をかけないと理解できないとしており、楽譜を読めるようになりたいと希望している生徒が多い。また、音楽表現の根拠となる音楽の基礎知識を定着させたい。	
具体的な目標	歌唱や器楽等の音楽活動を充実させるため、音楽表現の根拠となる音楽の基礎知識について学び、それらを活かし知識の定着を目指す。	
目標達成のための方策	・基本的な楽典の基礎知識を各題材に取り入れ習得させる。 ・実技を通して音楽活動と共に知識の定着を目指す。 ・学びのまとめの時間の確保や、課題の点検をし、理解度の確認と事後指導を実施する。	

具体的な取組み状況	・知識を使った音楽活動を取り入れる。 ・一人ひとりまとめのテストを実施した。	D
達成状況	・定着が図れていない生徒が一定数いるのが現状である。 ・反復練習するための手立てがまだ足りていないところがある。	

自己評価	(評価) B	(根拠) 実技で精一杯になってしまい、知識を活かせていないところが見られる。	C

↑
基準評価
↓

A:具体的な活動がなされ目標を達成できた
B:具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C:具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。一度、「Ｆｉｎａｌｅ」のような楽譜ソフトを使ってみては如何か？楽典的な知識は確実に身につくと考える。 ・繰り返し指導を行い、少しずつ習得できるように。 ・基礎知識はどうなりましたか？	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	・基礎知識をただ覚えるだけになっているところも見られる。基礎知識を活用した表現できる授業をもっと取り入れる。 ・音楽室にあるプロジェクターなどの機材もそろっているので、もっとＩＣＴを活用して目に見えるようにしていく。	A

P:目標の設定(Plan)、D:実践(Do)、C:実施状況の中間把握(Check-1)
C:自己評価[年度末の評価](Check-2)A:改善方策の実践(Action)

平成３１年度

評価領域	英語科

重点目標	英語でのコミュニケーション能力の育成	P
現状	・生徒が英語を話す場面が少ない。 ・英語を積極的に話そうとする生徒が少ない。 ・クラスによるが、リスニングが苦手な生徒が多い。	
具体的な目標	・教師の英語使用の割合を約50%以上にする。 ・生徒の英語使用の割合を約50%以上にする。	
目標達成のための方策	・間違いを恥ずかしがらずに積極的英語を話せるような雰囲気作りをする。 ・教師のみならず生徒にも英語を話す場面を多く設ける。	

具体的な取組み状況	総合的に英語力を向上させるためのモチベーションの一つとしてリスニング英語検定を実施。	D
達成状況	事前の対策が功を奏し、合格者が昨年度よりも増加し、自信がついた。	

自己評価	(評価) B	リスニング英検での結果は良かったが、基本的な英語力を定着させ、標準レベルの英語力を身につけさせる必要がある。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。個人的な体験では、突発的に、全校？組織をあげて「英語の日」（半日でも）をゲーム感覚で設けてはどうかと考える。(校長以下、生徒まで、英語以外を使うと減点) ・英語を話す場面をこれからも多く設け自信を持たせることが大切だと思う。 ・目標が数値であれば達成状況も数値で！	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	教員と生徒の授業での英語使用率は非常に感覚的であり、数値化するのは難しい。また、日本語でかみ砕いて説明したからこそ生徒のリスニング英検の合格率が上がったと思う。教員と生徒の授業での英語使用率向上と、試験の合格率の両立は難しい。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践(Action)

平成３１年度

評価領域	家庭科

重点目標	家庭生活に関わる基礎的・基本的な技術の習得	P
現状	被服分野の実技の面で苦手意識があり、苦労している生徒がいる。また習熟度の差が見受けられる。	
具体的な目標	将来自立した生活が送れるように、手縫いやミシンの扱い方、調理などの技術を定着させる。トートバックの製作では校章を入りの生地を用い、由工生としての帰属意識を持たせる。また、全員が航空機関係の図案をデザインしオリジナルの作品を作ることにより製作への意欲と完成後の成就感を味合わせる。さらに授業内での 100 %完成を目指す。	
目標達成のための方策	・実践的・体験的学習の時間の充実を図る。 ・実技の分かりにくいところ、難しいところは写真や実物などで示す。 ・自己評価や進度表を活用し、各自に到達度を確認させる。 ・ノート等の点検を定期的に実施し、習熟度を確認する。	

▽

具体的な取組み状況	生徒が授業しやすいよう教室環境を整えてきたが、ミシンや調理用具など古くなり難儀した部分もあった。他教科の先生に修理をしていただきとても助かった。初の試みでトートバックのポケット部分にアップリケかししゅうをすることにした。器用・不器用の差はあるものの、それぞれ工夫して作品を完成させることができた。	D
達成状況	被服分野では授業内で 100 %完成を目標としていたが達成できなかったが、放課後を利用して製作を続け完成させることかできた。分野では、学校で実施したものを家庭で作ったという生徒が増えてきている。	

▽

自己評価	（評価） B	（根拠）自立した生活ができるよう実践的・体験的学習の時間の充実を図るために工夫してきた。各家庭の生活を見直したり、実習後、家庭で作ってみる等の変化は出てきた。	C

↑
基準評価
↓

Ａ：具体的な活動がなされ目標を達成できた
Ｂ：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
Ｃ：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	（評価） A B B	（意見） ・自己評価のＢはひかえ目では？方策の密度を調整すれば、ＫＰＩは達成できるだろうし、そもそも１００％というのは考え難いことも考えた方が良いのでは？ ・写真や実物で確認させることにより、理解力が増し、生徒の意欲へとつながったと思う。 ・家庭で作る生徒が増えたことも成果だと思います。	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	ほとんどの分野に対し、興味関心はあるものの技術面では個人差がある．さらに集中して取組み完成させるよう、支援しつつ実物標本等をさらに分かりやすいものにしたいと思う。さらにグループ活動のいかし方を見直していきたい。、	A

Ｐ：目標の設定（Ｐｌａｎ）　Ｄ：実践（Ｄｏ）　Ｃ：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）
Ｃ：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）　Ａ：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）

平成３１年度

評価領域	機械科

重点目標	資格指導の充実	P
現状	現在は基本的な学習内容の定着を図ることを目的とした一斉指導による資格取得と、より高度な内容や技術の習得をめざした希望受験による資格取得がある。一斉指導では、生徒個々の能力や意欲により取り組みに差が生じることがある。技能検定等での希望受検についても、少数の生徒ではあるが、意欲にやや問題のある生徒が見られる。	
具体的な目標	・一斉受検の資格においては、合格率70%をめざす。 ・希望受検の資格においては、難易度にもよるが、80%以上の合格率をめざす。	
目標達成のための方策	・各資格試験にチャレンジする際の目標合格率を提示して意欲を高める。 ・複数の資格試験が重複しないようにバランスを考えて指導する。	

具体的な取組み状況	放課後補習(筆記と実技)を実施する。また、筆記試験対策として過去問を解かせ合格基準に満たない生徒には個別指導を行う。	D
達成状況	一斉受検計算技術検定３級合格率 94%(33/35)/初級 CAD 検定〈機械系〉66%(22/33)/機械製図検定 28%(10/35)　希望受検前期3級技能検定 100%(機械保全 4/4,機械検査 2/2,機械加工旋盤 2/2,同フライス盤 2/2)/2 級ボイラー技士 0%(0/1)	

自己評価	(評価) B	2級ボイラー技士は新規に取り組んだが、合格者なしであった。そのほかの国家資格では 100%となり、目標を大きく上回った。目標を達成できなかった検定には工夫が必要と思われる。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当であるが、対策につながる分析も「C」に含んでいると考えるべきであろう。 ・引き続き検定合格に向け取組んでいって欲しい。 ・Aに近いBだと思います。	C

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	不合格の理由を突きとめ、計画、指導法、時間配分を改善する。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践(Action)

平成３１年度

評価領域	電気科

重点目標	・義務教育段階のつまずきのある１年生への早い段階での指導、専門教科の授業に対応できるよう支援 ・専門性の向上、就職に有利な電気工事系資格取得への挑戦	P
▽		
現状	・計算を苦手とする生徒が多く、式の変形など義務教育段階のつまずきのある生徒が多い。 ・継続して勉強することを苦手としており、資格取得への意欲が低い生徒が多い。	
▽		
具体的な目標	・計算技術検定３級　合格率１００％ ・第二種電気工事士（２・３年）　合格率　７０％ ・第一種電気工事士　合格率　５０％	
▽		
目標達成のための方策	・１年生では、電気基礎、情報技術基礎、工業技術基礎などの時間を活用し科目の内容と関連づけながら式変形など計算力を身につけさせる。 ・２・３年生では、専門教科の授業の他放課後補習、朝学習などを活用し取り組ませる。	

具体的な取組み状況	・技能試験対策として、放課後の補習を実施。第一種技能試験に望んだ３名はよく練習に取り組んでくれた。	D
達成状況	計算技術検定3級　1年94％(31/33)　第二種電気工事士　2年64％(16/25)下期３名結果待ち 第一種電気工事士　筆記60％(3/5　3年1名　2年2名)　技能試験結果待ち	
▽		

自己評価	(評価) B	第二種電気工事士試験で、筆記７名実技２名の不合格者が出てしまい残念であった。筆記試験対策としてもう一工夫必要と思われた。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。±１人くらいのゆらぎは許容範囲と考える。あまりＫＰＩに厳格でなくても良いと考える。 ・合格に向かって指導の工夫を。 ・第二種電気工事士の合格率向上の対策を行いＡを目指してください。	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	・日頃の授業において、計算能力を身に付けさせるよう多くの問題に取り組ませるとともに、宿題などを通して自宅学習の定着を心がける。 ・生徒の不得手な問題を把握して対処することで、資格試験の合格率向上を目指す。	A

P：目標の設定（Plan）、D：実践（Do）、C：実施状況の中間把握（Check-1）
C：自己評価［年度末の評価］（Check-2）A：改善方策の実践（Action）

平成３１年度

評価領域	環境システム科

重点目標	ものづくりや化学分析、環境保全に必要な基礎的基本的な能力を育成する。	P
▽		
現状	・程度に差はあるが、多くの生徒が基礎学力・知識を身に付けていない。 ・環境問題や化学の学習に意欲的に取り組む生徒が少ない。 ・各種資格試験・検定の合格率が以前に比べ低下している。	
▽		
具体的な目標	各種資格試験・検定の合格率 ・危険物取扱者　丙種:50%　、乙４:25% ・計算技術検定　２級:50%(２～３年生)、３級:100% ・ワープロ検定　準２級:70%、３級:80%、４級:90% ・情報処理、プレゼンテーション検定　準２級:60%、３級:80%、４級:100%	
▽		
目標達成のための方策	・理解力が不足している生徒に対しては、学び直しを含めた指導をする。 ・資格等で合格、目標達成感を持たせるため、受検を促すとともに、補習等でサポートする。	

具体的な取組み状況	理解力・基礎学力が不足している生徒には、放課後の補習や再実習、週末課題などで指導をしている。資格受験対策として、プリントを配ったり、放課後の補習を行っている。	D
達成状況	・危険物取扱者　丙種：70%、乙４:30% ・計算技術検定　２級:14%、３級:73% ・ワープロ検定　準２級:75%、３級:80%、４級:96% ・情報処理、プレゼンテーション検定:3/10 現在、結果が届いていない	
▽		

自己評価	(評価) B	(根拠) これから受験する検定がある。また、受験済みのものでも、全ての目標をクリアできたわけではない	C

↑
基準評価
↓

A:具体的な活動がなされ目標を達成できた
B:具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
C:具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

▽

学校関係者評価と意見	(評価) B	(意見) ・自己評価は妥当である。KPIの弾力的運用も考えてよいのではなかろうか。 ・学び直しの指導は大切だと思う。ここから学力向上へ。 ・目標も明確であり良いと思います。	C

▽

自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	・資格や検定試験について、生徒の希望を踏まえながら実態に合ったものを受験するように再考する。 ・学力向上対策委員会と連携し、基礎学力の定着に取り組む。	A

P:目標の設定(Plan)、D:実践(Do)、C:実施状況の中間把握(Check-1)
C:自己評価[年度末の評価](Check-2)A:改善方策の実践(Action)

令和元年度

評価領域	建　築　科

重　点　目　標	実技系科目における基礎・基本の定着	P
現　　状	中学までの学習内容の初歩的な部分までも理解できていない生徒も複数名いるほか、入学時点から建築に関心の低い生徒も増えてきている。製図や実習などの実技を伴う場面で、指示を理解できない生徒も増えてきている。	
具体的な目標	・各科目において生徒の実態に即した指導方法に努める。 ・全員受験している資格について、合格率８０％を目指す。 ただし、難易度により危険物取扱者は５０％、初級ＣＡＤ検定は６０％とする。	
目標達成のための方策	・理解しやすい指導、時間内に完結する指導に努めるとともに、ＴＴで遅れる生徒や集中できない生徒に随時細かく対応する。 ・最低限提出期限を守らせる指導で、極端な遅れを防ぐ。	
具体的な取組み状況	・作業の取り組みの姿勢や理解度の差を埋めるべく、ＴＴで主担当の教員とサポートの教員が連携しながら継続指導している。 ・全員受験：計算技術検定３級 100%（35/35）、パソコン利用検定 85.7%(30/35)、危険物取扱者 74.3%(26/35)、初級ＣＡＤ検定 68.6%(24/35) 今後実施予定の建築ＣＡＤ検定、ＱＣ検定も手厚く指導していきたい。	D
達　成　状　況	・指導法や生徒対応は、常に検討と意見交換をしている。 ・全員受験の資格試験については、生徒の頑張りや問題の傾向などの要素もあるが、高い目標値を設定しているのだが予想以上の結果である。	
自　己　評　価	（評価） A （根拠） 目標は達成されている。次年度への目標設定へ検証をしていきたい。	C

↑
基準評価
↓

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
B：具体的な活動はなされているが，目標は達成できていない
C：具体的な活動がなされておらず，目標も達成できていない

学校関係者評価と意見	（評価） A （意見） ・自己評価は適切で、活動「D」は良好で、敬意を表する。 ・今後も向上を。 ・目標値も達成状況も明確であり良い取組です。	C
自己評価および学校関係者評価に基づいた改善策	その後発表された CAD 検定では 100%、QC 検定は中止となった。今年度の受験生徒、問題傾向、科スタッフの状況は、来年度また変わっていくので、安心も無理な設定にもならないように、職員間で生徒の掌握や進度、取り組み方法などを常に検討しながら進めていく。	A

P：目標の設定（Ｐｌａｎ）　D：実践（Ｄｏ）　C：実施状況の中間把握（Ｃｈｅｃｋ－１）
C：自己評価［年度末の評価］（Ｃｈｅｃｋ－２）　A：改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）